

【聖書箇所】

ルカ福音書 8:40 イエスが帰って来られると、群衆は喜んで迎えた。人々は皆、イエスを待っていたからである。41 そこへ、ヤイロという人が来た。この人は会堂長であった。彼はイエスの足もとにひれ伏して、自分の家に来てくださるようにと願った。42 十二歳ぐらいの一人娘がいたが、死にかけていたのである。

イエスがそこに行かれる途中、群衆が周りに押し寄せて来た。43 ときに、十二年このかた出血が止まらず、医者に全財産を使い果たしたが、だれからも治してもらえない女がいた。44 この女が近寄って来て、後ろからイエスの服の房に触れると、直ちに出血が止まった。45 イエスは、「わたしに触れたのはだれか」と言われた。人々は皆、自分ではないと答えたので、ペトロが、「先生、群衆があなたを取り巻いて、押し合っているのです」と言った。46 しかし、イエスは、「だれかがわたしに触れた。わたしから力が出て行ったのを感じたのだ」と言われた。47 女は隠しきれないと知って、震えながら進み出てひれ伏し、触れた理由とたちまちいやされた次第とを皆の前で話した。48 イエスは言われた。「娘よ、あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい。」

49 イエスがまだ話しておられるときに、会堂長の家から人が来て言った。「お嬢さんは亡くなりました。この上、先生を煩わすことはありません。」50 イエスは、これを聞いて会堂長に言われた。「恐れることはない。ただ信じなさい。そうすれば、娘は救われる。」

51 イエスはその家に着くと、ペトロ、ヨハネ、ヤコブ、それに娘の父母のほかには、だれも一緒に入ることをお許しにならなかった。52 人々は皆、娘のために泣き悲しんでいた。そこで、イエスは言われた。「泣くな。死んだのではない。眠っているのだ。」53 人々は、娘が死んだことを知っていたので、イエスをあざ笑った。54 イエスは娘の手を取り、「娘よ、起きなさい」と呼びかけられた。55 すると娘は、その霊が戻って、すぐに起き上がった。イエスは、娘に食べ物を与えるように指図をされた。56 娘の両親は非常に驚いた。イエスは、この出来事をだれにも話さないようにとお命じになった。

1 群衆

本日の礼拝説教の準備で、繰り返し今日の聖書テキストを読んでいると、ある言葉に引っかかりました。「群衆」という言葉です。調べてみますと、ルカによる福音書では、「群衆」という単語は40回でてくるそうです。そのうちの40節から45節の間、たった五節の間に三回も出て来ます。今日の物語、特に出血が止まらない病の女性の物語には、群衆が大きい役割を果たしています。

ある聖書学者が、「福音書の中の『群衆』は、暗い背景のようだ」と語りました。確かに、主イエスや弟子達などの登場人物の背後にあり、一人一人の顔が見えない群衆、しかし、その場面によって様々に表情を変える「群衆」は、背景のようです。ですが、時

に群衆は物語を突き動かす役割も果たします。最も記憶に残るは、主イエスのエルサレム入城以降の群衆でしょう。主イエス一行がエルサレムに入城する時、群衆は歓呼してこれを迎えます。自分達の着ていた服を主イエス一行が通る道にしくほどに、躍り上がって喜び歓迎するのです。しかし、その僅か数日後、同じ群衆が、ユダヤ教の宗教指導者に扇動されて、逮捕され裁判にかけられた主イエスに対して「十字架につけろ」と憎悪に満ちた狂気の叫び声をあげます。群衆は、まるで一つの人格を持っているかのように、欲望のまま、気分のままに振舞い、態度を豹変させる不気味な存在です。

今日の聖書の物語では、群衆と、群衆の中から主イエスの御前に飛び出してきた二人の人物が描かれています。主イエスによって救われた二人です。二人と群衆とは決定的に何が違うのでしょうか。

2 会堂長ヤイロ

一人目は会堂長ヤイロです。会堂長とはユダヤ教の会堂で指導する人で、ユダヤ人社会では名誉ある地位の人です。人望もあり、それなりの財産もあったでしょう。しかし、今は、イエス様が湖の向こう側から帰って来られるのを待ちわびる不安な父親にすぎません。十二歳になる一人娘が病気で死にかけていたからです。当時の女性は、十二歳くらいから結婚していたようです。ヤイロにとって一人娘は、人生において最も輝く季節を迎えようとしている。彼にとって娘が大きな喜びであったことは想像に難くありません。しかし、そうであるからこそ、今、彼の恐れも大きいのです。勿論、方々の医者に診せるなど出来る限りのことをした筈です。しかし、娘の病はどんどん重くなり、遂に危篤となります。愛する娘の苦しみを見ながらも、自分は手をこまねいて見ているしかない。彼の気持ちは私達にもよく分ります。だから、主イエスがやっと戻って来られた時、群衆の目の前で、地位あるヤイロが、主の足元に恥も外聞もなくひれ伏し、「自分の家に来て娘を癒してください」と懇願するのです。主イエスはそれに応え彼の家へと向かいます。

3 押し寄せる群衆

そんな主イエスの周りに群衆が押し寄せてきます。42節です。この「押し寄せる」という単語は、「上からおおいかぶさる」という意味があります。主イエスを覆いかぶすほどに群衆が迫って来る、人にもまれるようにして、押し合いへし合いしながら一行は進んでいきます。この時の群衆はヤイロの娘の病を本当に心配していたわけではありません。もしそうなら主イエス一行に道をあけたでしょう。

群衆は観客でした。彼らが求めていたのは、御利益であり、見世物でした。群衆はイエスの体に触れればご利益があると思ったのです。イエス様から力が出て病気を癒していると評判になっていたからです。現代でも、有名な芸能人や相撲の力士に触れようとする群衆がいます。彼らは芸能人や力士から力やオーラを自分に取り入れようとするのです。

群衆は神を必要としていません。自分たちが神であるから。彼らが必要としているの

は、自分達の虚しさを埋める見世物であり、ショーであり、気休めの力なのです。私たちもそんな群衆の一員となることがあります。

4 穢れた病の女性

しかし、そんな群衆の中に身を潜めつつ、神を必死で求めている人がひとりいました。十二年間出血が止まらない病に苦しんでいた女性です。出血が止まらないのは女性特有の病気ですが、ユダヤ教の律法では穢れた病気とされていました。この病気で穢れる者となるのは彼女だけではありません。彼女が触れたものもすべてが穢れると考えられていました。ですから外出も禁止され、人に会うのも制限されていました。この病になった者は、社会には不要な者として排斥されたのです。彼女は12年もの間この病に苦しんでいました。12というのは、神の民イスラエルを象徴する数字です。神の民のただ中にあったにも拘わらず、彼女は死に続けていたのです。

だからこそ、この大変な病をなんとか治そうと彼女は奮闘しました。全財産をつぎ込むほどに、治療に全てを賭けたのです。しかし、誰からも治してもらえません。業病を抱えて彼女は、たった一人で死を生きて行かねばならない。どうにもならない。自分の無力に打ちひしがれていた彼女にとっても、主イエスが帰って来られたのは特別なニュースでありました。

5 そっと触れる女と探される主

彼女は、恐れおののきながら、周囲の者たちにはもちろん、イエス様にも気づかれぬように背後から近づき、屈みこんでサッと衣の房に触れたのです。どうしてか？それは自分が穢れていると思っていたからです。しかし、なんとかしてイエス様から出てくると言われる神の力を頂きたかった。それしか、今の彼女には望みはなかったからです。ヤイロのように「主よ、私の病を癒してください」と正面きって頼むことなどできない彼女は、ひそかに触るしかありませんでした。そして主イエスに触れた途端、出血は止まりました。沢山の群衆がイエス様に触れていたでしょう。しかし、神を真実に求めて触れた彼女のみでした。ですから、イエス様の力が出て行ったのも彼女だけでした。

しかし、話しはそれでは終わりません。主イエスが「自分に触れたのは誰か」と問いかけられたからです。主は、神に助けを求めて自分に触れた人を知りたかったのです。群衆のうちの一人ではなく、その人個人として、心を開いて知り合いたかった、出会いたかったのです。もっと言えば、友人になりたかった。それで、イエス様を強く求めつつも、群衆の中に身を隠しているかけがえのない「一人」を捜し出そうとされました。「私に触れたのは誰か」敢えて呼び求めてくださるのです。

6 信仰告白

出血が止まるという自分の身に起こった現実には驚いている彼女の耳に、彼女自身を

探す主イエスの声が聞こえてきます。穢れた病を負った自分が触れたことを知ったら、主イエスも群衆も怒り出すのではないか…彼女は怖かったでしょう。しかし、主イエスが真剣に自分を探しておられる姿に打たれた彼女は、恐れで体を震わせつつ、主イエスの前に進み出てひれ伏しました。そして、「**触れた理由と、たちまちいやされた次第を皆の前で話した**」のです。もちろん、イエス様に話したのですが、そこは、「**皆の前**」でした。これは大きな意味があることです。主イエスを通して神と出会ったこの女性。その出会いは、個人的なことではなく、神の事柄、公なことからです。だから「**皆の前で話した**」の「**話した**」の原語は、「**宣言する**」「**告白する**」という意味のある言葉なのです。彼女は、彼女しか知り得なかった病が癒されたこと、自分に起こった事実を皆の前で公に宣言したのです。そしてイエス様への感謝と信仰を、ひれ伏しながら告白しました。それまでの彼女には考えられないことでしょう。彼女との交わりを求めた主イエスの彼女への愛が、このような告白を生み、彼女を変えたのです。

7 ヤイロを支える主イエス

しかし、主イエスがこの女性に祝福の言葉を述べている間に、ヤイロの家から人が来て、一人娘の死を伝えます。ヤイロは呆然自失、主イエスの女性に対する言葉は、全く耳に入って来なかったのではないのでしょうか。家の者が「この上、先生を煩わせることはありません」と言っている、「ああ、もうイエス先生の出る幕ではなく、葬式の準備が始まっているのだ」死人のように顔色を失うヤイロに、主は声をかけます。「**恐れることはない。ただ信じなさい。そうすれば、娘は救われる**」“あなたは今、闇の力、死の力に捉えられようとしている。しかし、絶望することはない。神は死に打ち勝つ力があるのだ。その力に希望を置きなさい”と主が仰り、ヤイロを支えて下さっているようです。

8 死と眠り

主イエスがヤイロの家につくと、既にお葬式の準備が始まっていました。当時のイスラエルでは、お金持ちの家の者が亡くなると、「泣き女」と呼ばれる人々をお金で雇い、嘆き悲しむ歌を歌ったようです。彼らは死んだ娘の為に嘆きの歌を歌い、泣き声をあげて娘の死を悼みました。主はこの光景に声をあげます。「**泣くな。死んでいるのではない。眠っているのだ。**」しかし、そこにいる者達はある意味、死のプロです。娘が既に死んでいることは分っていました。だから、イエス様を嘲笑ったのです。人間から見れば当たり前です。遺体を前に、「眠っているのだ」という人がいれば、私達も失笑するか悲しみで錯乱していると思うか、そのどちらかです。しかし、神からご覧になれば、どうなのでしょう。

死ぬことを「眠る」と表現することがあります。「永眠」という言葉は、「死」と同義語です。ですが、「永眠」という言葉を教会では使いません。私たちは永遠に眠るわけではないからです。私たちは肉体の命が終わる時、死んで眠りにつきます。しかし、終わりの日には、

復活して父なる神のおそばに挙げられた主イエス・キリストから名前を呼ばれ、「起きなさい」と手をとって起こされる…と教会では信じているのです。この終わりの日の甦りを信じ、そこに望みを置いて生きています。つまり、甦りの主イエス・キリストへの信仰を与えられた者の死は、復活に向けての死であります。命に向けての眠りなのです。

ある年老いた引退牧師が数年前、最愛の妻を亡くしました。その牧師が次のような話をしました。「昔仕えていた教会の信徒さんからお手紙を頂いた。そこにはこうあった。“先生のことで、天国の奥様と祈りのうちにお話しをされているのでしょうか”。だけど、そんなことなどあり得ない。妻は死んだ。もう触ることも、声を聞く事もできない。話すこともできない、この悲しみは厳しく、虚しさは埋めがたい。この孤独はどんなに言葉を誤魔化しても現実だ。ただ、ただ、終わりの日に、私の主、妻の主でもあるお方が、妻の名前を呼び、『起きなさい』と起こしてくれること、それだけが私の希望だ。」その通りなのです。気休めは、絶望を超える希望にはなり得ません。私たちは、主が私たち一人一人の名前を呼び、手をとって起こして下さるその甦りの朝への確かな希望をもって、この地上を生きる者達なのです。

9 復活の主イエス

この終わりの日の出来事の先駆けが、ヤイロの家で起きました。主イエスは、死んだ娘の体に近づき、その手をとります。ユダヤ教では死体は汚れたものです。死体に触れた者も汚れるとして、清めの期間が過ぎるまで隔離されるほどです。しかし、主イエスは死の穢れを洗い清める神の聖さの中にあるお方です。死体の手を取り、呼びかけられます。ここは原語に忠実に訳せば、「大声で叫び呼びかけられた」です。主イエスはご自身の力の限りに叫びます。すると「娘の霊は返って来た」とあります。娘は息を吹き返し、すぐに立ち上がります。この「立ち上がる」という単語は、主イエスが復活された時に使われた言葉であります。ですが、この娘の蘇りは、終わりの日の復活の栄光を映すものにすぎません。娘はこのあと、地上の生涯を生きて、再び死を迎えたでしょう。一方、終わりの日の復活は、永遠の命への甦り、全く異なった者に変えられる甦りです。しかし、主イエスは、死を呑み込む大きな命の力をお持ちの方であることが、地上で証されました。

10 ヤイロと長血の女性の共通点

ヤイロの娘の甦りの物語と出血が止まらない女性の癒しの物語、密接に結びついた二つの物語を注意深く読む時、ここにまさに信仰の基本的なことが描かれているように思います。私どもの信仰、それは、私たちの力が尽きた所に始まるものだということです。私たちが必死で手を伸ばす、しかし、手は届かない、私どもが自分の無力に打ちひしがれる時、自分達の力ではどうしようもない所で、ただ主イエスを呼び求める所、そこに信仰が与えられるのだと、この物語は語っているようです。私たち人間が主を呼ぶ声はほんの些細なものです。十二年間病にあった女性は声もあげてはいないでしょう。ヤイロも

そうです。家の者から愛娘の死を告げられた時。茫然自失で崩れ落ちそうな彼を支えたのは彼の力ではなかった。ただ、主イエスの言葉が彼を支えました。「**恐れることはない。ただ信じなさい。そうすれば娘は救われる**」。まるで主がヤイロに代わって信仰を告白してくださったかのようです。弱く小さく、この先何が起こるかも知らない者達が、ただ主を呼び求めた。その時、主は私達に应えて下さり、か細い望みともいえないようなものを、確かな信仰と変えて下さる…そのように、この二人の物語は語っているようです。そんな二人は、主の御前に「ひれ伏した」二人です。

そして、「ひれ伏した」のは、今日の登場人物の中ではヤイロと女性だけではないのです。実は、主イエスは、娘を甦らせる場所に連れて入った三人の弟子…ペトロ、ヨハネ、ヤコブもそうです。彼らは、主イエスの弟子となる前は、ガリラヤ湖の漁師をしていました。ある朝、一晩中漁をしたが一匹の魚もとれず疲労感に囚われながらも、網の手入れをしていた時、主イエスに舟を貸すことになります。イエス様が湖から人々に話をされるためでした。その話が終わった後、主イエスはペトロをはじめヨハネ、ヤコブらに沖に漕ぎ出して漁をするように命じられます。一晩中一匹の魚もとれず、しかも漁に不向きな昼日中。彼らはしり込みしますが、「先生が仰られるなら」と沖に漕ぎ出して漁をします。結果はあにはからんや！舟が沈みそうな大漁です。そこでペトロは主イエスの中に人にはない神の聖さを見出しました、主の足元にひれ伏し、「主よ、私から離れて下さい。私は汚れた者ですから」と叫びました。ヨハネ、ヤコブも同じであった…とルカ福音書は伝えます。自分達の無力を超えて働かれる主イエスの力の前におののきひれ伏した彼らもまた、自分達の力尽きる所で始まる信仰を与えられていたのです。ひれ伏した弟子達が選ばれて、一人娘の甦りの証人とされたことは、非常に意味深いことだと思います。そして、それは私達も同じだと思います。

11 私たちのこと

だが、「私はヤイロや出血が止まらなかった女性とは違い、自分の無力に打ちひしがれていない」と思われるかもしれません。人間的には、当然です。ヤイロやこの女性のような経験を全ての人がするわけではありません。しかし、神から見ればどうでしょうか。

私達は、自分の力では人を裁かざるを得ない、敵を愛することができない者達、主イエスの言いつけを守れず、心に蒔かれた命の言葉を枯らしてしまうような者です。しかも、私達はどこかで「それでもいい」と思ってしまうのです。主イエスの足もとにひれ伏して自分の無力を認めるよりは、神の言葉を枯らした方がいいとさえ思う。私達は、基本的に悔い改めることは嫌がり、ナザレのイエスを「いと高き神の子」として真実に受け入れようとはしません。それまでの自分に死ぬことを拒み、お互いに憎みあい、裁きあい、そして同じことを繰り返しているのです。

それは、神から見れば、死んでいるも同然の命です。父なる神から送られてくる聖霊を心と体に迎え入れず、ただこの世の空気を吸いながら、肉の欲を満たし、信仰が眠ってしまっているのです。そして、ただの土くれとなって塵に帰っていただくの命であります。死を生きる命です。

今日、出て来る「群衆」も、そういう我々の現実なのだと思います。靈的に死んでいる人間には、神の御前に出ません。神に知られたいとは思わない。そんな人々が集まって群衆となります。そして、神ならぬものに支配され永遠の滅びへと向かうのです。私たちは、再々、群衆の一員となります。ルカはそんな人間の真実を描いています。「だからこそ、この物語は二千年間も世界中の人々に読み継がれてきた」と言った人がいます。その通りだと思います。

ですが、そのように自分達では気づかぬままに、神の御前には死んでいる私たちが、そのことに気づき、神の言葉を求めて真剣にひれ伏すように祈る時、主イエスは私たちの所へ来てくださいます。私どもの死に至る罪の汚れなど全く厭うことなく、靈的に死んでいる私の手を取って、「**起きなさい**」と語りかけてくださるのです。その時、死んでいた私たちは再び生きる者とされます。主イエスの言葉と行いにより、神の御前に目覚めて起き上がるのです。死んでいた私の力尽きた所で、主が手をとって呼びかけて下さるのです。そこにこそ救いがあります。「**この子はいなくなっていたのに見つかった。死んでいたのに生き返った**」と、父から言われた放蕩息子において起こった出来事が起こります。その時、私達は、神を真実に求めて礼拝する者とされるのです。神の前に生きかえった私たちは、もはや群衆の一人ではありません。神に知られた神の子となり、礼拝する者と変えられるのです。

12 安心して行きなさい

主に「起きなさい」と呼びかけられ新しい命に甦らされた私たち。主イエスは更に仰います。「**安心して行きなさい**」。私は礼拝の最後、派遣の言葉として「平安のうちにこの世へと出て行きなさい」と宣言します。この「平安のうちに行きなさい」という文章と「安心して行きなさい」という文章はギリシア語では全く同じです。礼拝を終えて出て行く者に最も相応しい言葉です。後ろから隠れてであっても、主イエスに触れたい、救われたいと切実に願い礼拝した者は、今日、主イエスの命の言葉によって造り替えられ、恐れを伴う祈りと賛美をもって応答します。その時、主イエスはその人々にこう言われるのです。

「神の子らよ、あなたの信仰があなたを救った。平和の内に出て行きなさい。」

皆さんと共に、主イエスからこのみ言葉を聞き、新たな命を与えられる礼拝をささげ続けたいと切に願います。